

○農業農村整備事業における建設コンサルタントの役割

農業は古来より、人々の知恵や工夫を積み重ねることで発展を遂げてきた。今日では、農業従事者個人の知恵や工夫といった範疇を大きく超え、理学や工学、あるいはそれらを基礎とした農学という体系から、より合理的かつ「技術的」な方法が農業においても追求される。

そうした状況において、それら「技術」を持つ者の存在は重要であるが、それを実際の農業従事者に求める事は不可能であり、それとは別の技術者集団として、建設コンサルタントが求められるところである。

農業農村整備において建設コンサルタントの担う役割は広範なものだが、それらは概して工学的な技術によるものであり、逆に工学の守備範囲であればほとんどが建設コンサルタントの事業となる。農業農村整備事業とは、例を挙げれば、「水田に必要な農業用水を確保するためのダムや堰の建設、営農条件を改善するための水田、畑の整備、農産物などを運搬するための農業用道路の整備、農村の環境整備などを行っている事業（農林水産省 HP）」である。その現場で工学的技術の求められる役割の大きさを思えば、建設コンサルタントの重要性は窺い知れる。

上記の様な特徴から、建設コンサルタントの事業内容は公的な性格が色濃く、取引相手としては官公庁や自治体といった公的機関が強く想定される。それは、先述の様な事業を進めることでの受益者の多さなどから考えられる。

一例として、農業用水路の設計・造成を考える。農地での水利用においては、配水が供給側主導であり受益者（農業従事者）側の需要の変化に対応していない（例えばそれゆえ水不足が起こる）ことや、水管理のための見回りが農家の負担となっていることが問題視される。その解決に資する一つの手段として、既存の開水路（「田んぼの近く」で想像される、開いた水路）を管水路（パイプライン）にしていくことが考えられている。管水路においては配水の機構は大きく異なり工学的な知恵が求められる（その詳細な記述は本レポートではしない）が、用水の効率的な利用の他、水路を地中化することで用地を有効活用（例えばその上の道を遊歩道や通学路に）できたり、そもそも水資源を節約できたりと、メリットは多様である。しかもそれらの多くは、その管水路を通して配

水される受益地の全体にとってのメリットとなる。その広さを考えるとき、農業農村整備の公的な側面の一端がわかる。そして先に例として挙げた用水路の設計・造成に加え、実際の工事前の調査、更には維持管理や機能評価といった諸処につけて工学的な手法・知識が求められるのは当然であり、そういったところに建設コンサルタントの役割がある。

近年は農業においても情報化が進み、システム設計やデータベース構築なども建設コンサルタントの役割の範疇だと言う。東京大学の学生は、「社会にとっていいことをしたい」「それなるべく広い範囲にとっていいことをしたい」というようなことを考えると、ほとんど思考停止と言っていいくらいの勢いで公務員しか視野に入らない（ような傾向を私は感じる）。それぞれの場面できちんと考えていけば、広く利益をもたらす仕事は多く見つけ得るし、農学部で学ぶ以上それらと自身との関係をしっかり見定めていきたいと考える。